

2017年1月8日 礼拝メッセージ

聖書：使徒の働き 5章 26～42節

説教：御名のためにはずかしめられても

はじめに

41節に「御名のためにはずかしめられるに値する者とされたことを喜びながら」とあります。大声で叱られたり強い口調で非難されたら普通はいやな気持ちになるものです。それがどうして喜ぶことができるのか。そのことを考えていきますが、その前にこれまでのあらすじをふり返ります。

ペンテコステの日に天から聖霊がくだり、続いて不思議な出来事が起こりました。何事かと不審に思っ集まってきた人たちに、ペテロが立ち上がり、あなたがたは救い主とされたイエスを十字架につけて殺したのだと宣べ伝えます。これを聞いた人々は心を刺され、救われていきました。

いっぼう、使徒たちの活動を見て苦々しく思っていた人たちがいました。それが今日登場する大祭司や律法学者と呼ばれる人たちです。一度はペテロとヨハネを逮捕するのですが手荒なことはできません。脅した上で釈放しました。ところが使徒たち会の働きは町の人々にも知られるように、ますます尊敬されるようになっていきます。

大祭司たちはもう我慢がなりません。再び使徒たちを捕らえ、留置場に投げ込んでしまいます。ところがその夜、御使いが現れ牢の戸を開き、宮に行つていのちのことばを語りなさいと言って、外に連れ出します。次の朝、牢にはだれもいないことがわかり大騒ぎとなります。そこへニュースが飛び込んできました。「彼らは宮の中で人々を教えています。」

これが前回までのあらすじです。

1 使徒たちの証言

1) 十字架につけて殺した

すぐに使徒たちは連れ戻され、裁判の席に立たされます。大祭司がこのように尋問します。28節。「あの名によって教えるはならないときびしく命じておいたのに、何ということだ。エルサレム中にあなたがたの教えを広めてしまい、そのうえ、あの人の血の責任をわれわれに負わせようとしているではないか。」

このことばから、彼らが何を気にしていたのかが見えてきます。二つあります。順番を変えて後に出て来る方を先に見ます。

まず一つ目「。そのうえ、あの人の血の責任をわれわれに負わせようとしている。」「あの人」とは、イエス・キリストのことです。大祭司たちには口にするのも汚らわしい名前なので、ここでは「あの人」呼ばわりです。これに対しペテロはまったく動じません。齒に衣を着せぬとはこのことです。30節。「あなたがたが十字架にかけて殺したイエス。」

大祭司は、自分たちがイエス殺しの犯人呼ばわりされることに腹を立てていたことがわかります。

2) イエスは罪の赦しを与える救い主である

けれどもペテロは、まるで相手の傷口に塩を塗るかのようにはっきり言います。どうしてそんなことをするのでしょうか。理由は31節です。「そして神は、イスラエルに悔い改

めと罪の赦しを与えるために、このイエスを君とし、救い主として、ご自分の右に上げられました。」

神が遣わされ、救い主とされた方を殺してしまったその罪は重大です。しかし、もしその罪を自分の口で告白して悔い改めるなら、神はいつさいの罪を赦してくださる。そのことがあるから、ペテロははっきりと言うのです。「あなたがたはイエスを十字架につけて殺した。そのことを認めて、罪を赦されなさい。」

3) 私たちと聖霊がそのことの証人です

大祭司のことばから何がわかることの二つ目。大祭司は、「なんと言うことだ」と言っています。短い時間にイエスの教えが急速にひろがったことに驚いています。なぜこんなにも早く、イエスの教えがエルサレムの町中に広まったのでしょうか。32節でペテロが言っています。「私たちはそのことの証人です。神がご自分に従う者たちにお与えになった聖霊もそのことの証人です。」

確かに使徒たちは、イエスから直接「あなたがたはわたしの証人となりなさい」と言われていましたからそのとおりです。それに加えて「聖霊もそのことの証人です」とも言っています。これはどういうことでしょうか。聖霊は目に見えませんが、都合のよいように聖霊の名前を出しているのでしょうか。でもそんなはずはないでしょう。根拠があるから言っているはずですから。何が根拠なのでしょう。

「神がご自分に従う者たちにお与えになった聖霊。」これがヒントです。そして29節も関係がありそうです。「人に従うより、神に従うべきです。」

2 神に従う者

1) イエスを見捨てたペテロ

ペテロは聖霊は神に従う者たちに与えられ、自分もその聖霊を与えられていると言っています。ということは彼は神に従っていたことになる。本当でしょうか。そもそも彼はいつも従順に神に従っていたのか。そんなことはない。イエスが逮捕され、裁判にかけられていたとき、一番近くに隠れて様子を見ていたのがペテロです。我こそは一番弟子であると言ってはばからず、死ぬときはイエスと一緒にだと豪語していた。ところが、いざとなったら急に怖くなって逃げてしまう。神に従うどころか、神を殺したのも同然です。いったい彼のどこから神に従う姿が見えるのでしょうか。

しかし実際にペンテコステの日に聖霊が降りました。大ぜいの病人がペテロの手でいやされています。ペテロの力ではない、聖霊の働きです。ということは、彼は神に従う者だということになります。いったいいつから神に従う者となったのでしょうか。

もう一度30、31節を読みます。「私たちの父祖の神は、あなたがたが十字にかかえて殺したイエスを、よみがえらせたのです。そして神は、イスラエルに悔い改めと罪の赦しを与えるために、このイエスを君とし、救い主として、ご自分の右に上げられました。」

彼は誰かが書いた文章をただ棒読みしているわけではありません。すべて実際の経験したことを自分の口で語っています。

2) ペテロを迎える神

イエスが逮捕され、裁判にかけられていたとき、ペテロはその場から逃げ出しました。イエスが十字架ではずかしめられていると

き、鍵をかけて家の中に隠れていました。もちろん、もう一度イエスの所へ戻らなければと考えたでしょう。でもおそろしくて体が動かない。そんな自分が情けなくて泣くしかありません。

神はどうされたか。よみがえられたイエスはペテロを尋ねて行かれます。ヨハネの福音書によれば、ペテロはそのとき船の上にいたのですが、岸に立っているのがイエスだとわかると、恥ずかしくなり湖に飛び込んでしまいます。いつまでも水の中にいるわけに行きません。岸に上がります。するとイエスは温かい食事の用意をして待っていていました。その手には釘の跡が残っています。自分の手で打った釘の跡だと思つて見ると見のもつらい。でも、間近にイエスの顔を見たとき、わかりました。イエスがこのように語っておられる。「あなたは神を殺したことに苦しんでいる。神に従えなかったことで自分を責めている。でも、あなたが殺した神は死からよみがえって今ここにいます。それは何を意味しますか。あなたが犯した罪が赦されたということではないですか。あなたなは安心して前に進みなさい。」

人は様々な罪を犯しますが、神のひとり子を殺すことよりひどい罪はありません。その罪でさえ赦されるのですから、赦されない罪があるのでしょうか。いいえ、イエスは言われました。「人はその犯すどんな罪も赦していただけます。」(マルコ3章28節)

ペテロが自分の力で神の前に出て、神に従うようになったのではありません。イエスの方から尋ねて来られたとき、そのよみがえられた姿を見て、ペテロは神に従う者へと変えられていきました。

まじめな方は、「クリスチャンは神に従う

生き方をすべきだ」と考えます。間違いではない。でもがんばってできるものでしょうか。がんばらなければできないものなのでしょうか。イエスは私たちの荷を軽くするために来られたはずではないですか。ペテロのことを見てください。彼こそががんばって良い弟子になろうと努力した人です。それがあのおり失敗してしまう。でも彼は変わった。自分で自分を変えたのではありません。主が私たちを変えてくださった。私たちもおなじです。主が近づいてくださる時を待てばよいのではないのでしょうか。

3) 御名のためにはずかしめられても

さて、使徒の働きに戻りましょう。裁判の席で、人々から尊敬されているガマリエルという人が立ち、こんなことを言います。もしこの働きが神から出たものではなく人から出たものなら、必ず滅びる。しかしもし神から出たものであるなら、絶対に滅ぼすことはできない。だから、使徒たちのことは放っておきなさい。

さて結果はどちらが正しかったのでしょうか。ペテロのときから二千年経った今もイエスがキリストであることは宣べ伝えられています。答えは明らかです。

このようにして使徒たちは釈放されました。41節。「そこで、使徒たちは、御名のためにはずかしめられるに値する者とされたことを喜びながら、議会から出て行った。」

鞭で打たれて、脅迫される、そんなはずかしめを受け、悲しんだり恥ずかしく思ったりすることはあっても、喜ぶとは思えません。それなのに、なぜ使徒たちは喜ぶことができたのか。

そもそも最初にはずかしめを受けられた

のは誰だったのか。私たちの主であるイエスではないですか。私たちを救うために十字架ではずかしめを受けられました。苦々しい思いで忍耐していたのではなく、それを喜んでおられました。なぜ喜んでいただけたのか。先ほど言いました。ペテロがよみがえられたイエスに出会ったとき、何を見たのか。イエスがはずかしめられているとき、逃げてしまったペテロのことをうれしそうに迎えてくれている御顔を見ました。イエスは自分を拒絶していない。いやむしろイエスは、ペテロのなかにある罪の苦しみといつしよにいてくださることがわかった。イエスは、私たちといつしよに苦しみをともにすることを、なによりの喜びとされてきました。

私たちは、イエスの御顔をもっとはつきりと見ることができればと願っています。どうすればもっとはつきりと見ることができるのでしょうか。イエスと私たちがどこでつながっているかを考えてみてください。良い行いをすればイエスに近づくことができるのでしょうか。そう考えたのが大祭司たちや律法学者たちでしたが、彼らは何をしたか。神のひとり子を殺しました。良い行いばかりを見るなら、結局神を殺すことになるのです。

ということは私たちは反対の方向を見ればよい。世の人々から非難されたり、脅かされたり、鞭で打たれるようなはずかしめを受けたときこそ、イエスに近づくことができる。イエスが十字架で味わった苦しみは、今自分が経験している苦しみそのものだった。そこで主との交わりが深められていきます。ひとりぼっちではありません。聖霊が与えられ、いつしよに苦しんでくださり、苦しみの中から励ましを与えてくださいます。

主に従う道とはそのような歩みであろう

と思います。